

館蔵品から②

竹内栖鳳(1864-1942)
《虎・獅子図》
1901(明治34)年
紙本墨画淡彩
166×371cm(6曲1双)

竹内栖鳳は1900(明治33)年、翌年に開催されるパリ万国博覧会の視察のため渡欧した。その際立ち寄ったアントワープの動物園で初めてライオンを目の当たりにし、滞在期間を3週間延長してまでその写生に明け暮れたという。それらをもとに制作した獅子図は他にも数点のこっているが、画面から今にも抜け出してきそうなほどに迫真した獅子図は、伝統的な唐獅子図に見慣れていた当時の人々をおおいに驚かせた。

滞欧での写生に基づいた獅子は、その体毛一本一本まで気を抜かないこまやかな描写がとられている一方、獅子が上体を乗り上げている岩

の荒々しい描写は、狩野派の伝統的な表現がなされている。栖鳳は渡欧前の1892(明治25)年に発表した作品《猫児負喧》によって円山派、四条派、狩野派の寄せ集めの絵だ、得体の知れない鶴のようだと言われたが、栖鳳は「それが熟して、調和して、はじめて一家の機軸を出すのであって、はじめは鶴派より入るのがかえってよいと思う。」と言ってあえて改めようとはしなかった。

欧州から帰国後、栖鳳は雅号を「棲鳳」から「栖鳳」に変え、画家として心機一転の姿勢もみられる。滞欧中コロロやターナーに傾倒し、日本の絵具で光や空気を感じを表現しようとセピアに金泥を混ぜてこの獅子図を描いたこともそれと同様の姿勢とあって良いだろう。しかしすべてを摂取し変化させようとしたのではなく、対象の真に迫るがための表現方法のひとつだったのだ。本作品にはそういった栖鳳の制作に対する姿勢と自信があらわれている。(Ha)

